

大瀛『浄土真宗金剛鉤』要義

西 原 法 興

『浄土真宗金剛鉤』二卷（『真宗叢書』第十卷所収、以下『金剛鉤』）は、寛政九年（一七九七）の刊行。欲生帰命派を説諭する意図が存在すると同時に、信楽帰命説を組織化・体系化された点に於いて重要な著述と言えよう。同時期の『横超直道金剛鉤』は『金剛鉤』を基軸に進展・熟成させた書物である。

一 『金剛鉤』概観

願生帰命説批判が上巻の内容である。大瀛は『願生帰命弁』（以下『帰命弁』）の「三心即一の欲生の一心」なる記述について、過失十条を挙げ、その論理的根拠を批判する。特に第六条「不知欲生義趣失」に於いて、欲生解釈に通別・本末・前後の三門を設定している。

即ち欲生通別においては、「凡そ浄土門の人皆願生者、その心相はことごとく是れ欲生心」と述べ、欲生自体を廃棄はしないものの、機受に於いては三心は信楽一心にのみおさまると説く。

また欲生の本末を論じる箇所では、欲生心を本に約せば如来作願のことであり廻向心であり、若不生者の誓意は衆生を我国に生れさせんと欲することを欲生心というのであり、本願招喚の勅命である。他方その体を言うならば一名号のことであり、機受の側では聞信を除いて他にはないと述べる。

加えて欲生の前後においては、信前・信中・信後の三段階の欲生を建てる。その信中の欲生解釈で「如来真実の欲生心、衆生心中に徹到するが故に、此の信中欲生を獲得す。…今信楽に入りてはじめて如実の欲生心を得。如来廻向広大の願心是において成就す」と論じて、信中の欲生は信楽が衆生心中に入って初めて如実の欲生心となるのだと断言している。これが『横超直道金剛鉤』（六二丁左）では、次第に表現が簡明になり「信中の欲生とは実は信楽の異名なり」と論定しているのである。

次に下巻は三業帰命説への論難である。『帰命弁』上巻（五丁左）では「何の障縁もなからんものは、必ず仏前に向かい

三業を表わすべきことなり。」と説かれる一方、「唯一心に阿彌陀如来後生たすけたまへとたのむ、その一念の時仏の御たすけ一定と信ずるを本とするなり、(略)これを正定聚に住すと名づく」(七丁右)とも論述されている。功存によると「唯一心に阿彌陀如来後生たすけたまへとたのむ」ことによって、その一念の時に如来の救済が決定することを信じるのが本である」と理解するのである。他方大瀛によると、この本とは(三業帰命が未発の時に)既に聞信一念時に正定聚に住し、摂取が成就することを意味している為に、この本とは、真宗正意を指しているのだと解釈する。そこでこの本が既に成就しているのなら、何故帰仏の儀式を立ててまで仏の摂取を請求するのかと難じ、信後の三業は報仏恩の恭敬修のみであると力説するのである。「たすけたまへとたのむ」を三業に行じる義と取るか、帰命の義と取るかが焦点になるところであろう。

二 三業帰命説批判要義

三業帰命説批判の焦点は(一)就義觀察と考察出来よう。就義とは、第十七及び十八願成就文を根底に据えて、六種の観点から検討を加えるという意である。

先ず①「観大行義」は、真宗大行の観点から三業帰命説を教諭していくものである。六字釈の「阿彌陀仏者即是其行」を検討する中、衆生を摂取する行を指示して、南無阿彌陀仏

の名号が如来摂取の働きであると断じる。如来は既に救済の働きを円満具足して、無疑の義を成就されたのであり、一方衆生には本来清浄真実の願行は存在しない。そこで如来は如実の願行を成就して、衆生に信受させて作願造作させずに、願行を具足させるのである。よって名号聞信の帰命の一念が、発願廻向即是其行を具足して、往生浄土の真因となるのであると論述している。

次の②「観聞信義」は「聞其名号信心歡喜」に関する検討である。大瀛は、聞とは聞信具足するのを如実の聞というのであると前提して、以下の項目を立論するのである。

その中三業帰命とは如何なる相であるかを論じているが、如来廻施と行者作業が半受半施する相であるとするならば、半自力半他力であろう。意業信受は他力、同時の行者身口業は自力であり、その作業は意業に基づいて起こるので、その意業もまた自力であって如実の信受ではない。加えて廻施される法体願行が既に円満していることを認識していない為に、単一に信受のみでは不足と考え、自身の身口業を添加して正因を強固にしようとするに至る。

これは功存時代から度々依用される論法で、信心が他力廻施であるから、その相である欲生心も他力であると誤解しているもので、先に意業に信受した後に、身口業を起して帰命するのであるから、三業帰命は他力であり、自力ではないと

大瀛『浄土真宗金剛鐺』要義（西原）

主張するならば、一体三業者の意業とは如何なる義を信受しているかが問われよう。仮に三業帰命と説くことのみを聞信して信受しているのであれば、それは聞信不具足であるし、摂取不捨と説くのを聞信して信受するのであれば、自力起作の帰命によって摂取を蒙ろうとしているので不如実である。そこで聞信一念に摂取不捨と説くことを信受するならば、それは如実の聞である。よって聞信一念に仏の摂取を蒙り、起行する身口業が報恩行を起さない訳がないのである。三業者は信樂正因説を嫌い、欲生正因を立てる為にこのような過失があるのだと論難するのである。

重ねて三業帰命の四過を述べる段でも、改めて聞信不具の失を挙げて考察する。三業者は身礼口請が信の表相であるというが、仮に聞信具足の信であれば、信後に改めて表相して救我と請じ、身口に救いを請うことを表相する必要があるのか。三業者は摂取を知らず、定得往生を知らず、信後の身口業が報恩行であることを知らないのと論難している。

さらに帰命の覚不覚を問題とする所以は、羯磨帰命を行うための理由付けであり、記憶・不記憶により帰命心の強弱を判じるのであり、これは建立自心であるとも難じている。

三業帰命が身口の帰命を信の表相であると主張し、身口礼して恭敬を表現すべきであると論じることに対して、大瀛は真実の恭敬とは他力不思議の深信こそが恭敬の至極であると

する。「出離の縁あることなし」と深信して、自力を捨てるのが恭の至極である。「疑いなく慮いなく彼の願力に乗じて定めて往生を得る」と深信して弥陀に帰命するものが敬の至極である。聞信一念にこの至極の恭敬が具足するのであると自説を述べ、一形相統称礼報恩がその表相であると語勢を強めるのである。次の③観一念義は「乃至一念」の検討であり、④観摂取義は「即得往生」についての論考である。

そして⑤観所被義は「諸有衆生」と説かれる受法の機に関する説示である。本願の誓意は下々品の機が臨終の一刹那にあって、浄土に到らせることである。専ら仏願に順ずるのが浄土真宗であり、その所被の機は下々品臨終極促の機をもつて準則とするものであると大瀛は説く。他方羯磨帰命は、教授する者が行人を引いて仏前に参り、威儀を正して身業に礼拝し、口業に摂取を乞い、意業に勉励して、その後、帰命事究竟して漸く仏の摂取を蒙ると指導するものである。このような悠々遅延の帰命相ならば臨終の機には間に合わないものであり、弥陀大悲の本願の誓意に背くものである。

また障縁の機については、ただ意業だけでよいとするが、その意業とは羯磨帰命を正因とするものなので、意業とは運想三業の自力欲生心のことであろうと論難を加えている。

また最後に⑥観本尊義を設け、様々な角度から説論しているのである。

(二) 就文觀察(文証についての検討)

『帰命弁』には三業帰命の文証は、「願生偈」・『莊嚴經』・『御文章』(五の八・二の十三)の四文を挙げている。大瀛は特に『御文章』の「まうす」について、三消釈を設けて口業帰命を否定している。先ず「まうす」には口業の義又は語助の義があり、必ずしも口業に限るのではない。『領解文』に「たのみ申して候」等と云うが、この「申す」はただ語助の義である。第二には、『大經』に「我心念言」と説くように、心念を言とすることは仏法の通例である。また「一念御たすけ候へと申さん」と言うが、これは口に申すの義ではない。「一言」と云わず「一念」と云うのは、そこに信一念の義が存在し口称一念の義が存在しないからであろうと論ずる。第三に「たすけたまへとまうす」とは、世間でいう委託の相に寄せて、仏願に帰託する相を示すものである。そこで『御文章』の「まうす」は口業帰命を示す語ではなく、むしろ「たのむ」の方に信心の義があると解釈する。大瀛は『御文章』では、言葉は世俗の相に引寄せて表現しているが、語義は正しく信一念を表現するものであると論述するのである。

(三) 就事觀察(事証についての検討)

『帰命弁』の第五(二六丁右)の「因みに例証を出す」段では、高祖・明法房・女人受化の三事証を挙げている。その中『大經』阿難見仏の説相は、三業派が最有力の論証とするも

のであるが、大瀛はこれを逆に行者帰命の一念を示す文証であると反駁する。三業帰命が親鸞の正意ならば、何故随所に羯磨帰命の作法を著述されていないのかと述べるのである。

結論

願生帰命説においては欲生は「信樂の相」であると力説することに對して、大瀛は「信樂の義別」或いは「信樂の異名」であると論断している。

彼の『帰命弁』批判は、「帰命の一念」「聞信の一念」に集約されると言えよう。たのむは信心のことであり、その信心は名号を聞信するばかりであるから、三業帰命は一切介在し得ないと断定する。加えて三業派は帰命の一念後に羯磨事を行い、その結果仏の攝取に預かると誤解するが、当流の正意は帰命と攝取は同時の事態であると述べるのである。一方強固な信樂派である大瀛にしても、三業それ自体を撥無する訳ではない。往生の業因は聞信一念に決定するので、信後の三業は報恩行と位置付け、身口意の三業を認容していることにも留意したのである。

〈キーワード〉

大瀛、三業惑乱、功存、『願生帰命弁』、信樂、羯磨帰命

(龍谷大学大学院研究生)